

郷土研究 伊丹公論

復刊
第40号
通巻 59 号

年 3 回発行

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒644-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
Tel 072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会



伊丹公論の
バックナンバー
はこちら

いたみアーカイ部 第28回(2024年度)『図書館を使った調べる 学習コンクール』で奨励賞受賞

図書館振興財団が主催する第28回(2024年度)『図書館を使った調べる学習コンクール』で、市民企画のいたみアーカイ部が奨励賞を受賞したことを記念して、その活動について寄稿いただいた。

いたみアーカイ部は、伊丹市立図書館ことば蔵で月に1回の活動をしている「おとなの部活動」です。わたしたちが興味を

持っているのは、既に大切に維持保存されている文化財だけではなく、普段、何気なく通っている道の少し変わった曲がり角

や、暗渠^{あんきょ}になってしまった水路の流れや、少し変わった地名や、今でも残る昔ながらの風景など、今、記録を残しておかないと失われてしまいそうな事柄についてです。気になっている場所や道を実際に歩いて、図書館の地域資料から掘り下げて調べ、レポートや冊子、ウィキペ

ディアなど、いろんな形式で記録に残していくという活動をしています。

これまでに取り組んだ調査はいくつかありますが、伊丹小学校の正門前に、大正時代まで流れていた川「加茂井(かもゆ)」を、猪名川の取水口を出発点に流れをたどって昆陽口まで歩いて調べたり、江戸から明治に変わり発布された学制にしたがって、阪神間でもいち早く創立した「伊丹小学校」をはじめとした、伊丹市内の17の小学校の变迁を調べまとめました。また、2023年には、猪名川を水源とするもう一つの水路「九名井(くめゆ)」を伊丹空港

トを完成させました。

「図書館を使った調べる学習コンクール」は、図書館振興財団が主催するコンクールで、小学1年生から高校生、大人も応募できる年1回のコンクールです。毎年全国各地から約12万点のレポートがエントリーされます。小学生の部、中学生の部、高校生の部、大人の部、子どもと大人の部と5つの区分があります。わたしたちいたみアーカイ部は2018年から毎年、大人の部にエントリーしています。このコンクールにエントリーすると同時に、ウィキペディアに記事を書くことも活動の1つです。みなさんもよく目にされ利用されている「ウィキペディア」は、世界中のボランティアの共同作業によって執筆及び作成される多言語のインター

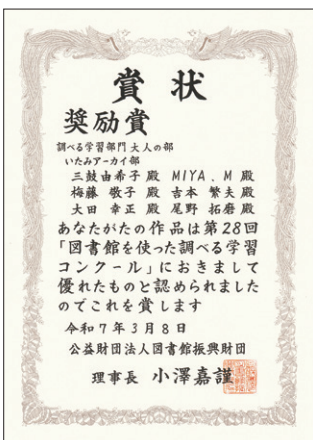
ネット百科事典です。多くの利用者は事典として閲覧・参照すると思いますが、一定の執筆ルールを守れば自分で記事を書くこともできます。

これまでに「加茂井(かもゆ)」や「九名井(くめゆ)」の項を新しく作りましたが、今回は、既にあった「有馬街道」の項目に追加修正をしました。これまでに「有馬街道」は、神戸を起点とする4つのルートの記載が中心でしたが、わたしたちの調査の内容や、国立国会図書館のデジタルアーカイブから得た図版をアップロードして、大坂から有馬温泉まで、尼崎・伊丹を通る歴史あるルートの記述を充実させました。

時間をかけて調べた事柄をまとめていろんな形のアウトプットを完成させることは、達成感

も満足感もありますが、いたみアーカイ部の本当の楽しみは、興味を持った場所や道を実際に歩いて、地図からではわからない路地をみついたり、思いもよらない高低差があったりという新しい発見をすることです。また古地図と照らし比べてみると、建物や風景は変わっていても道筋自体はあまり変わらず、昔の人も見ていたのだろう風景をおのずと想像してしまうことも楽しみとなっています。

現在は「昭和40年〜50年代の伊丹市内のお買い物事情」の調査に取り組んでいます。アンケート調査を元に、実際にその場所に行ってお話を聞くことができます。今年コンクールも入賞を目指してがんばります。



奨励賞の賞状



神崎の燈台で集合写真



尼崎歴史博物館事前調査

ですが、きっかけは、伊丹郷町を南北に通っている道は「有馬道」か「大坂道」か?という疑問からでした。有馬街道を次のテーマに決め、メンバーで尼崎歴史博物館へ行き下調べをしてから、全ルートを4分割してまち歩きをしました。その内容を分担して執筆し、7か月間をかけてレポ



令和7年2月22日(2025)に元大関琴奨菊の秀ノ山親方が率いる秀ノ山部屋の皆さんをお招きし、「伊丹市立図書館に秀ノ山部屋がやって来て、親方が

館長に就任?」を開催した。当日の朝は、金剛院にて振舞いちゃんこがあったが、あつという間に予定数が終了となり、親方とお弟子さんを一目見ようと多くの方が図書館に詰めかけた。

「一日図書館長セレモニー」にて、山田図書館長より委嘱状と一日図書館長タスキを受け取り、「必ず1日1冊本を読んでください!」と来館者に呼び掛けた。一日図書館長の最初の仕事は、「秀ノ山部屋による絵本の読み聞かせ」を実施した。絵本は相撲の優勝決定戦を題材にした迫力あるタッチの「はつきよ

いどーん」である。親方とお弟子さんにより迫力ある読み聞かせで、会場は大いに盛り上がった。

その後、図書フロアに移動し、本を元の棚に戻す「返本業務」を親方自らが体験。現役時代の親方の写真が掲載された本を相撲本特設コーナーに展示した。

また、当初の予定にはなかった「ちびっこミニ相撲教室」を親方の呼びかけで急遽実施し、子どもたちと四股を踏み、楽しんだ。最後は、来館者の皆様と写真撮影し、ことば蔵開館以来の大盛況となった秀ノ山部屋イベントは幕を下ろした。

(ことば蔵職員)

写真協力Ⅱ西田写真館



現代人物風景

今年の2月中旬から大相撲春場所の間、秀ノ山部屋が伊丹市に宿舍を構えた。猪名野神社には本格的な土俵があり、秀ノ山部屋の力士たちは、その土俵で稽古を重ね春場所に挑んだ。

稽古が行われる朝の猪名野神社には300人程の観客が訪れ、金剛院で行われた振舞いちやんこでは想定以上の人たちが通りに並ぶ状況であった。今年の宮ノ前の春は、賑やかな季節となった。

秀ノ山部屋が伊丹市に宿舍を構えることに一役買ったのが、畠太一さん(49)Ⅱ写真Ⅱだ。20年ほど前に知人の紹介で大阪府松原市にある佐渡ヶ嶽部屋の大坂宿舎に見学に行ったことが縁で、琴奨菊関

(現秀ノ山親方)に出会った。世代が同じくらいで、現役力士が車の運転を禁止されていることもあって、移動のお手伝いなどをすることになり、畠さんが贈答品制作などをしてしている関係で、琴奨菊関の化粧まわしや引き出物などの制作も掛け、公私ともに親交を深めていった。

琴奨菊関が大阪に来たときには旧伊丹シティホテルに宿泊することもあり、猪名野神社の土俵や宮ノ前を案内した。宮ノ前の風情を気に入ったようなので、独立する際に伊丹市に宿舍を構えることを提案したそうだ。

伊丹市に相談したり、宿舍を探したりと忙しい思いをしたそうだが、猪名野神社の協力があり、友達の縁から宮ノ前の人たちを中心に多くの人に手助けを

してもらえた。畠さんから始まった秀ノ山部屋を応援する繋がりに、秀ノ山部屋伊丹誘致実行委員会が結成され、広報や稽古の警備に番付表の発送準備など多岐にわたる支援をおこなった。

秀ノ山部屋の伊丹市滞在中は、中心市街地で食事や銭湯を利用することで、多くの市民の方たちと交流することができたそうだ。3月場所千秋楽祝賀会も伊丹市内外の方たちが当初の想定人数を超えて参加された。

年度末は、もともと忙しい時期で大変だったが、多くの人の協力があり、秀ノ山部屋の力士たちと多くの市民が交流も持てたことがうれしくてやってよかったとにこやかに感想を話されていた。

(嘯風弄月)

蔵出しニュース

図書館公募イベント表彰セレモニー開催

セレモニーに参加した受賞者



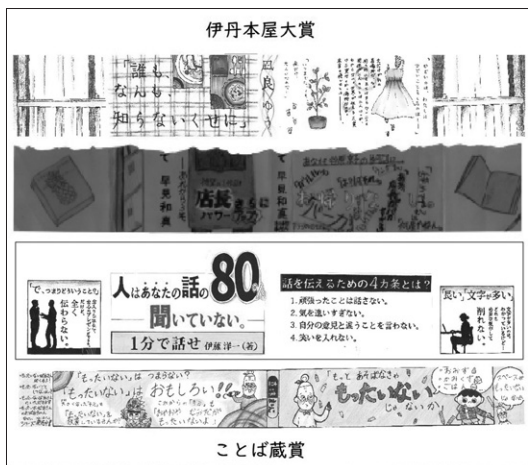
令和7年(2025) 4月26日に、ことば蔵公募イベントの表彰セレモニーが開催された。

・第11回しおりんピック
読書に欠かせない「しおり」を手作りしその出来栄を競うもので493点の応募があり、画家で市芸術家協会代表幹事の北里桂一さんの審査により金・銀・銅メダルが、来館者による投票でことば蔵賞が選ばれた。金メダルの木村沙紀さん、

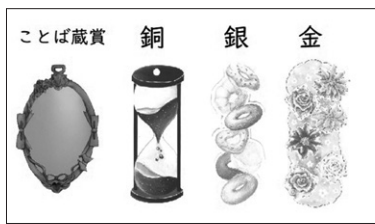
銀メダルの高橋夢羽さん、銅メダルの平野由紀子さん、ことば蔵賞の磯崎亜衣さんが受賞された。セレモニーには、木村沙紀さん、高橋夢羽さん、平野由紀子さんが参加されご家族と受賞の喜びを共有された。

・第12回帯ワングランプリ
自作の本の帯のキャッチコピーやデザインを競うもので、

帯ワングランプリ受賞作



しおりんピック受賞作



川賞作家の田

伊丹市にゆかりのある芥

(交流事業担当)

・第12回日本一短い自分史
伊丹公論復刊39号で受賞者について掲載したが、セレモニーには秀作『古代への情熱』に魅せられての前田哲さんが参加された。

88点の応募があった。伊丹本屋大賞は、市内の4店舗の書店が選出し、選ばれた帯を巻いた本が販売される。『流浪の月』の帯を制作した渡邊理央さん、『新! 店長がバカすぎて』の帯を制作した高橋陽向さん、『1分で話せ』の帯を制作した鈴木大空さん、『もったいないばあさん』の帯を制作した大野美月さんが選ばれた。また、来館者の投票で決定することば蔵賞には、『バムとケロのさむいあさ』の帯を制作した小泉晴菜さんの作品が選ばれ、鈴木大空さんと小泉晴菜さんがセレモニーに参加された。

・第10回タイトルだけグ
ランプリ
伊丹市にゆかりのある芥川賞作家の田

伊丹俳壇

「兼題なし」坪内稔典 選
(市立伊丹ミュージアム名誉館長)

最優秀賞

友達のようなバス停ぺんぺん草

友常甘酢(横浜市保土ヶ谷区)

「友達のような」というバス停のたとえがいいなあ。バスに乗らない日でもこの句の主人公はバス停へ行きそう。そしてぺんぺん草と遊ぶ。

優秀賞

動き出すからくり時計春の間
君だけが私の見方冷奴
死せる午後砂丘転がる夏帽子
春風に粉チーズ舞うナポリタン
以和為貴終戦日

睦月くらげ(埼玉県新座市)
竹中佳子(伊丹市)
平松泥沸(伊丹市)
絹川英明(伊丹市)
藤田晋一(宝塚市)

伊丹歌壇

「兼題なし」尾崎まゆみ 選
(玲瓏)編集委員。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員)

最優秀賞

神殿と思えば急に

かけがえのない影を帯びる給水塔

堺紀彦(京都府長岡京市)

聳え立つ給水塔は、神殿に似ていると思ってしまふと、神々しさをまとうて立っているように見えてくる。そんな人間の心の動きを描写した佳品。背の高い給水塔は昭和の名残。伊丹には、かつて背の高い給水塔が目印の白洲邸があった。

優秀賞

春の夜の底へと沈む憂の澱指で触ればまだやわらかい

友常甘酢(横浜市保土ヶ谷区)

(ゆれてる)肩をあずける熱源に傾くことを決めた天秤

白川楼瑠(宝塚市)

嬰兒のやうなる無垢をひとかけらブローチにしてそとと胸へと

瑞乃ゆみ(神戸市西区)

着くまでの時間もうれしいちよつといい靴に何度も目をやりながら

芍薬(千葉市美浜区)

新米のおにぎりに在る家族愛苗から育てたご褒美でした

小林寛久(三重県桑名市)

今回は、俳壇の兼題はありませんが自由な夏の句とします。歌壇は「レモン」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は8月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円を進呈。下のQRコードを利用すると、スマートフォンからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。





番頭・遠山陽子さん

昭和36年3月に創業した老舗の酒屋「遠山酒店」が静かにたたずんでいます。半世紀以上にわたり地域に根ざし、世代を超えて愛され続けるこの酒屋を支えるのが、番頭・遠山陽子さん(56)。

入り口をくぐると、壁一面に日本酒やワインがずらりと並び、まず目を引くのは、それぞれの酒に添えられた手書きの紹介ラベルだ。銘柄だけでなく、香りや味わいの特徴、蔵元の想いや季節の楽しみ方などが、丁寧な筆致で描かれたラベルに込められている。やわらかな文字やイラストからは、つくり手と売り手の情熱が伝わり、思わず手に取ってみたいくなる。まさに酒と人をつなぐ手紙のようなものだ。奥へ進むと現れるのは、畳敷きの「茶の間」。この茶の間は、茶道(表千家)と着付け、「和の心」を育む学びの場となっている。

老舗探訪

和の心に酔いしれる
茶の間と学びのある酒屋

遠山酒店
伊丹市鈴原町 9-395



色々なお酒の紹介

そして「遠山酒店」の顔ともいえる番頭・陽子さんの着物姿がまた、この店の空気を一層引き立てる。凛とした立ち振る舞いの中に、気さくで温かな人柄がにじみ、初めて訪れた人でもすぐに打ち解けられる魅力を持っている。

遠山酒店の特徴は、蔵元から直接仕入れるこだわりの酒。その仕入れの決め手となるのは、「味」と「人との繋がり」。陽子さんは、「お酒は人の心を映すもの。だからこそ、お酒の味の好み、そして志が同じ蔵元のお酒を選んでいきます」と語る。

買い手への心遣いにもこだわり購入前のお酒を試飲できるほか、季節限定の地酒や希少な銘柄も少量ずつ味わうことができる。また熱燗スパイスなど燗酒をアレンジして楽しむための珍しい商品も揃えている。

陽子さんは「あたたかいお酒」の魅力も積極的に発信。今年4月には、旧石橋家住宅で『お燗をつけるワークショップ』を開催し燗酒の奥深い世界の魅力を広めている。「温かいお酒を飲みながら交わす会話は前向きなものになる。心身だけでなく、言葉まであたたためてくれるのが温かいお酒の力」とお燗を語る陽子さんと、一期一会の一杯を見つけてみませんか。(KUMI)



楽器で遊ぼう

いたみで ポラ活!

なないろ同好会
高齢者の居場所づくり



ストレッチヨガ

アイ愛センター(障害者福祉センター)では、ほぼ毎日高齢者向けのイベントを行っているグループがある。なないろ同好会である。メンバーは14名。

楽器で遊ぼう、健康マージャン、卓球など多数の催しものが開催されている。

特に毎週金曜日13時から開催の健康マージャンは大人気で、



昆陽池公園でモルック

40名くらいの参加者がいて、認知症予防に役立っている。また女性限定の健康マージャンを別に行っている。参加費100円でおやつ付き。

楽器で遊ぼうは、第1水曜日13時半から、参加者が楽器を持ち寄って、演奏を楽しんでいる。参加費100円でおやつ付き。

卓球は、日曜日13時半から休

を動かすことにより健康維持にも役立っている。参加費100円でおやつ付き。

他にもストレッチヨガは、第1、第3火曜日13時半から参加費100円や、昆陽池公園でモルック(木の丸棒を使って、木製のピンを倒す競技)を第3水曜日13時半から参加費100円で1等、2等には景品がある。エコハイクは、町歩きで第4水曜日に開催。

そしてまちづくりプラザと連携して、なないろカフェを第4水曜日13時半から、スワンホールの調理室で開催。これは一般の人との交流を深めるためで、どなたでも参加でき、途中からの出入りが自由である。参加費は100円。コーヒ、紅茶、お菓子付き。

このなないろ同好会は、令和

元年(2019)に、代表の岩下奈々子さんが鴻池で、高齢者の居場所として、なないろカフェを開業。いろいろなイベントでにぎわい、コロナ禍も乗り切ったが、諸事情もあり令和4年(2022)に閉店。しかしこのカフェに通った方々から、復活を望む声があり、同好会として再出発することになった。

運営費は、参加費と、社協の赤い羽根の補助金で賄っている。そして最大のイベントは、年に1回、秋から冬にかけて、アイ愛センターで、会費200円で60人規模の音楽祭を開催している。今や地域の高齢者にとって、このような居場所はなくてはならない存在となっている。

問い合わせは岩下奈々子

TEL 090・7113・7477

(細尾哲也)



店主の小谷由紀さん



5本【無添加】チーズケーキ

郷土 無添加にこだわったクリームチーズケーキ
土産品 紹介 Boule de neige (ブルドネージュ)

白基調の明るい店内に足を踏み入れると、朗らかな店主の小谷由紀さんが笑顔で迎えてくれる。木製のカウンターには、カラフルな包装紙でキャンディー風に包まれたチーズケーキや、クラフトビールなどのさまざま

な種類のお酒がバランスよく並べられている。その横には、お店オリジナルのグッズや雑貨がにぎやかに飾られていて、心おどる空間だ。店内にいるお客さ

んは皆とてもリラックスしていて、それぞれゆったりとくつろいでいる。店主の小谷さんの大らかな雰囲気がお店全体に広がり、とても心地の良い場所である。

同店のチーズケーキは、国産材料、無添加にこだわったクリームチーズケーキで、子どもも妊婦さんも安心して食べることができる。子どものころにケーキ屋さんのショーウィンドウが宝石のようにキラキラして見えた感動から、パティシエになりたいと思った小谷さん。見た目にもワクワクする包装もこだわりの一つだ。基本の5種類(プレーン、レモン、レーズン、チョコナッツ、抹茶)をはじめ、季節のフルーツなどを使ったバリエーション豊かで可愛いチーズケーキは、ちょっとしたプレゼントにぴったりと大好評

だ。

小谷さんは10代の頃からパティシエを目指し、ケーキ屋さんで猛修行。その後、Boule de neige (ブルドネージュ)として、初めの4年間は店舗を持たず、大阪で製造し、伊丹で予約販売やイベントに出店する形で地道に営業してきた。着実にファンを増やし、令和6年(2024)6月に地元伊丹で実店舗を開店。カフェwel(ウェル)の営業も開始した。同店はチーズケーキのほかに、さまざまなお店と積極的にコラボしている点も魅力的だ。コーヒ、りんご飴、おにぎり、マフィン、雑貨等、小谷さん自他店に声をかけて、多様な楽しみが詰まった魅力あるお店になっている。伊丹警察署から歩いて5歩。ぜひ立ち寄ってみてほしい。

Boule de neige
(ブルドネージュ)
伊丹市千僧6-9タカラビル102



オンライン販売サイト



Instagram



ホームページ

カフェwelの営業日やイベント出店情報はInstagram掲載。左のQRコードを利用すると各WEBサイトを閲覧することが出来ます。

(石田善美)

幾山河 生きて伊丹に家さだめ

ことば蔵2階伊丹作家コーナーに新展示

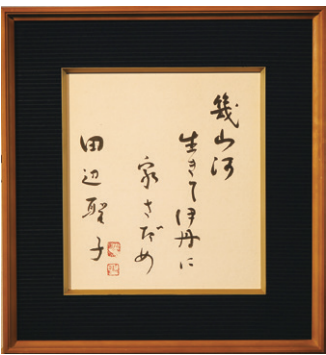
伊丹市立図書館本館ことば蔵では、伊丹に縁深い芥川賞作家である故田辺聖子さんと宮本輝さんの作品や関連資料をご覧いただける「伊丹作家コーナー」を2階ギャラリーに設置している。田辺聖子さんが晩年まで過ごされたご自宅（梅ノ木、既に解体済）に関する直筆色紙と写真を令和7年（2025）3月から、新しく公開した。両方と

も田辺聖子邸を施工した「新栄工業株式会社」（東有岡、既に廃業）の社長であった故山本生雄さんのご息女である山本由美子さんから寄贈いただいた資料である。

直筆色紙には『幾山河生きて伊丹に家さだめ』とある。田辺さんが伊丹に転居されたのは昭和51年（1976）の頃。元々書庫として利用していたマンションに住まわれていた。その後、新しくご自宅を建てられる際、大阪で生まれ長く神戸で生活されていた田辺さんが、伊丹を終の棲家と決めたことを詠んで山本社長に贈られたものである。写真は2枚あり、どちらも昭和58年7月27日に行われた地鎮祭の様子を写したものである。前列中央に田辺さん、後列に山本社長の姿がある。お供え物には田辺さんが好きだった老松の日本酒が並ぶ。地鎮祭は「猪名野神社の神主を招いた」と山本社長が日記に残されている。これらの資料は通年展示しているので、ことば蔵に来られた際はぜひ、2階ギャラリーの「伊丹作家コーナー」をご覧いただきたい。



地鎮祭の写真の内の1枚



寄贈いただいた直筆色紙

（交流事業担当）



海が無い伊丹にヨットクラブが存在する。瑞ヶ池で毎月第3日曜日に、一般向けに試乗会を行っている。1回100円で乗ることが出来る。持ち物は無し。申し込みも無し。公園を散歩中でもふいに乗れる。参加者が多いときでも、15分から20分程度走行。またエンジンが無いので、乗るだけでなく

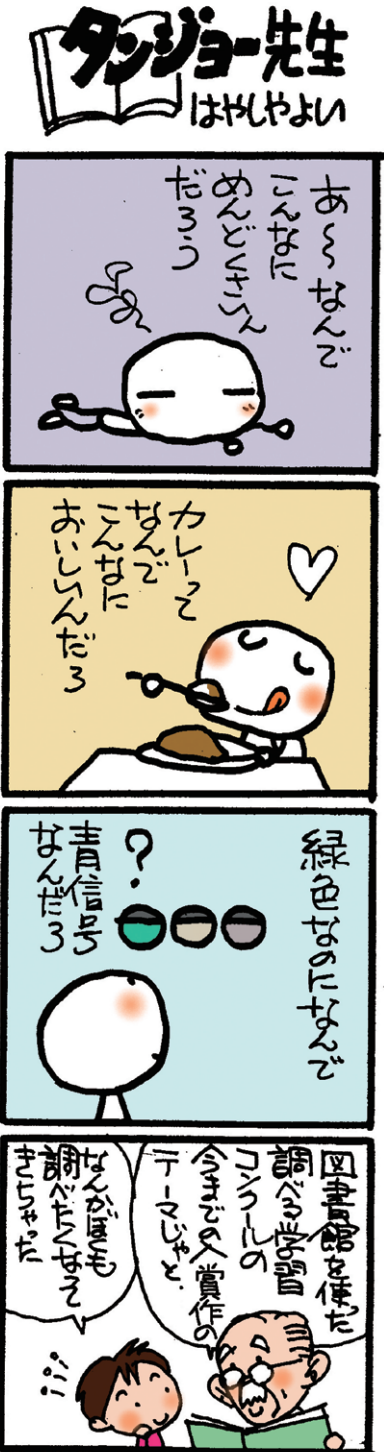


初めて操船する二位奏士朗さん

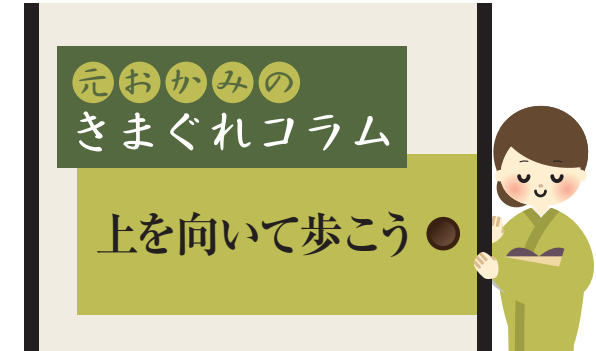


1人用のヨットを操船する廣瀬晴生さん

希望者は操縦体験もできる。一緒に乗った小学4年生の二位奏士朗さんとお父さんの二位好敏さん（40）は、伊丹のだんらんホリデーのホームページを見て参加したのだという。今まで乗ったことが無く、楽しそうだったのが理由である。奏士朗さんは、風の力が思った以上に強く両手で操作するのが難しかったが、もつとうまくなりたと言っていた。指導をした当クラブコーチの森華奈子さん（50）は、奏士朗さんの呑み込みが早くびっくりしていた。当クラブの正式名称はB&G伊丹海洋クラブ。昭和55年（1980）に設立。瑞ヶ池を拠点に盛んな活動を展開したことから、昭和57年にB&G財団が艇庫を建設。コーチの森さんは、子ども2人が、小学1年生と2年生の時に試乗会に参加して翌年入会。



林やよい 伊丹市在住。毎日新聞兵庫県版にイラストエッセイ「新くるまいすまいる」連載中。



あつ落ちていて、ひろうて神社にシャリン。同じことが3・4回あったと言うのも、膝を手術したので杖を突かざるわけにはいかなくなり、落ちていたものが良く見える。杖が相棒となつたのでどこへ行くにも杖と行く。ある日、道端の側溝のふたの上下に落ち葉がたまっているのを見つけて気になる。吸い殻も捨ててある。側溝のふたを上げて掃除をした。あー気持ちが良い。まだ杖を突いているが・・・。3メートル先を見て歩くと良いらしい。



柿の花 昭和100年 我八十 （平きみえ）

（細尾哲也）
筆者も操縦を初めてしたが、風を操る楽しさを感じた。不器用ながらも何とか少しだけ操縦ができた。だから即入会した。このクラブは伊丹市民でもまだまだ知られていない。コーチは、「世界一気軽に乗れて、操縦できるクラブはここだけかもしれない。だから試乗会には何も考えずに参加してほしい」と語っていた。



ここで操船を覚え、海で練習した。そして2人ともヨットの日本代表に選ばれたこともある。今まで当クラブでは、事故は起きていない。波や流れが無いので安全にヨットを操縦できる。しかし安全管理には気を使っている。また年会費12000円と安い。これは操縦に慣れた方が、今度はボランティア指導者として協力しているからだ。

先日、飲んだ日本酒は「ちよつと おまち」。ネーミングが面白いので購入したのだ。「おまち」は、もちろん「お待ち」の意味ではなく、酒米の雄町。「雄町」は、岡山県の農家が発見した酒米で、生産量の約95%を岡山県産が占めている。栽培が難しいことから一時は生産量が激減し、幻の米、と呼ばれていたが、酒蔵の根強い要望により再び生産量が回復した。「ちよつと おまち」は山形県の酒蔵で造られているが、雄町特有のふくらみのある味わいだった。もちろん待たずに買ったその日に飲み干した。



したのは言うまでもない。

▼プロレスが繋いでくれた縁
連休に久しぶりに大好きなプロレスを観に行った。そこで一緒にいた方に漫画家でイラストレーターがいっしょだった。その方が後日、イベントで似顔絵を描くコーナーを担当されるというので、電撃参戦。

めっちゃ若く描いていただいて、リングネームも頂戴した。それが今回のイラストである。楽しい連休となった。（ときわ喜多）